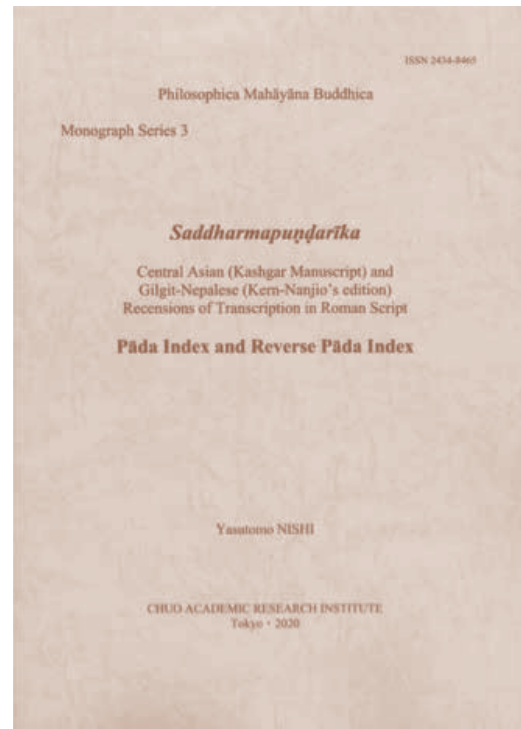


## *Philosophica Mahāyāna Buddhica* Monograph Series 第3号を発刊

このほど弊研究所は、*Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series* (大乘仏典思想叢書) 第3号を発刊した。編纂は学術研究室の西康友主幹が行なった。弊研究所ではこれまで、法華経における文献学的研究の基盤整備として、ジャイナ教聖典、初期仏典、初期大乘仏典の語彙・詩脚索引や写本カタログなど36冊を刊行してきた。本叢書シリーズ第1号・第2号では、ローマ字化した『ケルン・南條本』(1908-1912年)とこれに含まれる「梵文法華経写本中央アジア伝本カシュガル本」の語彙索引(第1号が正順語彙索引、第2号が逆順語彙索引)を刊行している。今回の発刊第3号は、この続編の詩脚(偈文)索引である。『ケルン・南條本』とは、南條文雄と Hendrik Kern の2人が8種類の梵文法華経写本を用いた初の写本校合校訂本である。爾来、この校訂本は梵文法華経研究で必ず参照される標準テキストであるが、複数の写本の伝承・書写年代・出土地域の別を考慮せずに校合したことで、編集上に問題があることが指摘されている。

法華経は梵文法華経写本の漢訳とされる鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』(406年)の出現により、東アジアの多くの地域で伝承され、受容されてきた。日本では、天台宗や日蓮宗、新宗教教団の多くが『妙法蓮華経』を所依の経典と定めており、今日までに膨大な法華経研究がある。『妙法蓮華経』は当時入手できた梵文法華経写本を用いながら漢訳されたと考えられるが、この原典や編纂事情などの詳細は不明である。本書はこの解明の一助に資することが期待される。

初の梵文法華経写本の発見(1821年)以来、数本の写本が出土し、これを用いた初の梵文



法華経写本によるテキスト『ケルン・南條本』が刊行された(1908-1912年)。このテキストによりいくつかの梵文法華経写本が紹介されると、多くの探検隊は写本を収集し、仏典中最多の67種類の写本が現存する。これらは中央アジア伝本とギルギット・ネパール伝本の2つに大別されることが知られている。このテキストは8種類の写本を校合し編纂されているが、写本校合基準などの編集方針が不明瞭で不備も多く、言語学上の厳密さを欠くことが指摘されてきた。この問題を解決すべく、『ケルン・南條本』の改訂本として3つが刊行されたが、いずれも『ケルン・南條本』と同様の編集方針のため、抜本的な解決に至っていない。この解決には写本を一つ一つ整理することが必要であると考えられ、現在までにほぼすべての写本写真版(影印本)と、写本をローマ字化して校訂したローマ字転写校訂本が刊行された。このことで梵文法華経写本

の整理が大いに進捗した。現在までに『ケルン・南條本』の編集問題を払拭するためのいくつかの研究があるが、どの研究も部分的であり、現存する梵文法華經写本すべての言語学的（語彙・語形・語法・韻律・書写法等）分析が不十分である。現在でも梵文法華經研究の標準テキストとして109年前に出版された『ケルン・南條本』が最も重宝され、梵文法華經からの現代語訳は主にこのテキストに依拠し、ローマ字転写校訂本もこのテキストに基づいた校訂であるために、抜本的な『ケルン・南條本』の編集問題を解決に導いていないのが現状である。

また、『妙法蓮華經』の原典や編纂事情を解明するための梵文法華經と漢訳法華經の対照研究は、『ケルン・南條本』と『妙法蓮華經』の2つだけのものがほとんどである。複数の梵文法華經写本や現存する3つの漢訳法華經（『正法華經』（286年）・『妙法蓮華經』・『添品妙法蓮華經』（601年））の対照研究のいくつかがあるものの、すべての現存梵文法華經写本と3つの漢訳法華經を用いた総合的な研究が途上で、研究者の見解も次の①～④のように異なっている。①『正法華經』が中央アジア伝本カシュガル本に、『妙法蓮華經』がギルギット・ネパール伝本に対応するとした説、②『妙法蓮華經』が中央アジア伝本に、『正法華經』がギルギット・ネパール伝本に対応するとした説、③中央アジア伝本古写本が『正法華經』と『妙法蓮華經』に、ギルギット本が『添品妙法蓮華經』に対応するとした説、④漢訳の原典とされる梵文法華經写本の推定は不可能であるとした説などである。

上記の解明のためにはまず、梵文法華經研究の標準テキスト『ケルン・南條本』の編集

問題を払拭することが急務であり、このための準備として、現存する梵文法華經写本すべての総合的な実証的言語学（語彙・語形・語法・韻律・書写法等）研究が必要である。

本書は、出土地域や書写年代によって相違する写本ごとの語彙・語形・語法・韻律・書写法などを文献学・言語学的手法で分析する準備として、『ケルン・南條本』脚注に明記された中央アジア伝本カシュガル本における詩脚（偈文）を精査できる資料となる。

弊研究所では、本叢書シリーズのより広い活用を願い、全ページをインターネット上に公開（<https://www.cari-saddharmapundarika.com/philosophica>）している。これまでに刊行してきた *Philologica Asiatica*、*Philosophica Asiatica* の両シリーズについても中央学術研究所ホームページ「論文検索システム」（<https://www.cari.ne.jp/search/>）からPDF版をダウンロードできる。

本書の著者は身延山大学国際日蓮学研究所研究員としても在籍しており、今年度4月に文部科学省（日本学術振興会）より、本叢書を含むこれまでの法華研究（A Study of the Sanskrit and Chinese Lotus Sutra : <https://www.cari-saddharmapundarika.com/research-and-achievements>）の実績が評価され、科研費助成研究（基盤(C)一般）として採択された（課題番号：21K00058、研究課題名「梵文法華經諸問題解明のための基盤テキスト構築－『ケルン南條本』校訂へ向けて」）。研究期間は5年間。本書の研究を進捗させた多くの成果が期待され、これらの一部が本叢書シリーズからの刊行を予定している。